

高校生を含む十八歳未満の方の閲覧を禁止いたします。

この物語はフィクションであり、

実在する人物・団体・事件等には一切関係がありません。

なお物語に出てくる表現等はすべて創作です。

犯罪行為を助長させるものではありません。

絶対に真似をしないでください。

無断転載、複製、ウェブへのアップロードを禁止します。

體驗版

凜^{りん}ちゃんの記録
06

○月△日（水）晴れ

今日も三限の経済数学で凜ちゃんの斜め後ろに座る。

一生懸命にレポートを書いている横顔が、いつ見ても綺麗だ。

時折、シャープペンシルの頭をトントンと顎に当てる癖がある。

ああ、可愛い。

いきなり話しかけたら気持ち悪いと思われるかな……？

○月■日（金）雨

凜ちゃんの自宅がわかった。大学から徒歩十分のあの小綺麗なアパート。

家賃の割に新しくて良い物件だが、下見をしたところ壁がかなり薄
いみたいだ。

凜ちゃんの生活音を他のやつが聞いているなんて、許せない。
駅から少し遠いのも心配だ。

○月▲日（月）曇り

ついにチャンスが来た。隣の二〇三号室の住人が今月末で退去手続きをしたと不動産屋の担当から連絡が入る。その場で即決し、手付金を払って契約を完了した。

もうすぐだ。ようやく、凜ちゃんの隣を手に入れられる。

1 お隣さん

築五年ほどの、まだ新しくて小綺麗な二階建てアパート。

私が暮らす二〇二号室は、大学から徒歩十分という立地の良さもあって、とても気に入っている。ただひとつ、家賃がそこそこの手頃なところと引き換えに、壁が少し薄いことだけを除けば、だ。

隣の部屋の住人が少し大きめのクシャミをすれば、「お大事に」と言いたくなるくらいには聞こえてしまう。

「……それにしても、今日は騒がしいなあ」

土曜日の午前十時。

ベッドの上で大学の課題レポートを開いていた私は、薄い壁の向こうから響いてくるドタバタとした騒音に眉をひそめた。

ゴトゴトと重い荷物を運ぶ音。荒い足音。そして、低く響く男たちの声。どうやら、先日空き室になった隣の二〇三号室に、新しい住人が引っ越してきたらしい。

どんな人が隣人になるのだろう。

壁が薄いだけに、もし怖い人や、夜中に大騒ぎするようなタイプだったら最悪だ。そんな不安が胸をよぎり、私は気が気ではなかった。

数時間後。ようやく外の騒音が落ち着き、レポートの続きに集中し

ようとしていた時だった。

ピンポーン、とインターホンの音が響いた。

「はい」

荷物の配達予定なんてなかったはず、と思いながらベッドから下りる。

あ、もしかして引越しの人の挨拶まわりかな。そう気づいて、Tシャツの上に慌ててパーカーを羽織り、髪を少し手櫛で整えてからドアを開けた。

「こんにちは。朝から騒しのめがしくしちやってすみません、隣の二〇三号室に引越してきた、東雲で——……あつ！ 森川もりかわさん!?」

目の前からかけられた声の心地よい低音に、私の心臓がドクンと跳

ねた。

少し袖を捲り上げた白いシャツを着て、片手に小さな紙袋を持ったその人と目が合った瞬間、私は息を呑む。

(……え？ うそ……!?)

そこにいたのは、サラサラの黒髪に、涼しげな奥二重。形の良い唇に、誰もが親しみやすさを覚えるような、完璧に爽やかな笑みを浮かべた男の人。

——しのめちひろ東雲千紘。

私と同じ大学の経済学部に通う、学内でもよく見かけるイケメンだ。ルックスの良さはもちろん、コミュニケーション能力が高くて誰にでも優しい。彼が友達と楽しそうに笑っているだけで、周囲の空間が

なんだか華やいで見える。

それが私の東雲くんに対しての印象だ。

「わ……。ほんとに森川さんだ。えっ!?　もしかして、お隣さん?

俺——わかるかな?　東雲千紘」

「あ、えつと……。もちろん、わかるよ。同じ講義、受けてるよね」

声がうわずらないようにするので精一杯だった。まさか、あの東雲くんが私の名前を知っていたなんて。

呆然とする私の目の前で、東雲くんは、ぱあっと顔を輝かせる。

みんなが一度は見たことのある、キラキラとした彼の笑顔を前に、私の頭はますます混乱するばかりだ。

「よかった、知っててくれた。森川さんがお隣さんとか、すげー嬉し

い」

「んええっ!? う、嬉しい!」

驚き過ぎて変な声が出てしまった。

「うん! 前から話してみたかったんだけど、なかなかきっかけ見つけれなくてさ。あ、これ、よかったら。好みに合うといいんだけど」
そう言って東雲くんが手にしていた紙袋を差し出してきた。

「あ、ありがとう、わ、ここのお店、好きなのここ」

「えっ、よかった! ロールケーキにしたんだけど、大丈夫だった?」

「う、うん、大好き」

紙袋に書かれたロゴは、駅前にあるお気に入りのパティスリーのものであった。

ほろりとほどける柔らかい生地と、溢れるほど詰まったコクのある生クリーム。思い出すだけで頬が緩んでしまう、大好きなロールケーキだ。

「よかったー。——あ。あのさ、俺まだこの辺のことよくわかんないし、よかったら今度一緒に色々教えてくれたりしない？」

「う、うん、もちろん……私でよければ」

「やった！ほんと嬉しい。じゃあ、まずは連絡先交換しよ！」

差し出されたスマホ。慌てて自分もスマホを取り出し、連絡先を交換する。

「ありがとう、森川さん。これから、よろしく」

スマホをしまふ東雲くんの口元が、爽やかな笑みとは違う、微かに

歪んだ笑みを浮かべたような気がしたけれど、すぐに元の完璧な笑顔に戻った。

「うん、こちらこそよろしく。ケーキありがとう」

「じゃあ、また」

ドアが閉まった瞬間、心臓の鼓動が速くなっていくのを感じる。

私はドアに寄りかかって、ずるずるとへたり込んだ。

（東雲くん、私のこと知ってくれたんだ……。嬉しい、けど、心臓に悪すぎる……）

こうして、東雲くんとの、にわかには信じがたい隣人生活は始まった。



それからというもの、東雲くんと顔を合わせる機会は格段に増えた。

ゴミ出しをする時、大学へ向かう時、ポストを見に行く時。

「おはよう、森川さん」「おはよう、東雲くん」

その度に笑顔で挨拶を交わし、時にはそのまま一緒に大学まで歩く。学内で会えば必ず手を振ってくれて、先日は「このレポート難しいよね」なんて、一緒に課題をやる約束までした。

壁が薄いだけに、彼の生活音は多少は聞こえてくるけれど、夜に音

樂をかけるわけでもなく、友達を連れ込んで騒ぐわけでもない。最初
の不安は杞憂だったようだ。むしろ、隣から微かに聞こえる彼のくし
やみや、たまに聞こえる電話の声さえも、彼との距離の近さを感じさ
せて、心を温かくさせた。

一ヶ月も経つ頃には、

「凜ちゃん、おはよう。今日も一緒に行こう？」

「うん、千紘くん」

と名前で呼び合うくらいには親密になった。

最初こそ緊張したけれど、話してみると彼は本当に気さくで、私の

つまらない話にも楽しそうに耳を傾けてくれる。時折見せる、少し茶目っ気のある笑顔を見るたびに、心臓がぎゅうっと音を立てる。

このドキドキの正体には、もちろん気づいている。

私は今、どうしようもないほど、千紘くんを恋をしている。

お隣さんという偶然に、運命すら感じてしまうほどに。

このまま、もっと仲良くなれたらいいな、なんて期待を膨らませてしまうほどに。

そんなある日、東雲くんの方から「知り合いから結構良いお酒とつまみをもたらったんだけど、凛ちゃん、よかったら一緒に飲まない？」と誘われた。

ふたりきりで、しかも彼の部屋に行くのは初めてだった。誘われただけで幸せすぎて、数回うなずくので精一杯だった。

2 告白の夜

そして迎えた約束の金曜日の夜。

私はクローゼットの前で、一時間近く頭を悩ませていた。

仲の良い隣人の部屋に行くだけなのだから、気合が入りすぎていると思われるのは恥ずかしい。けれど、部屋着で行くわけにもいかない。結局選んだのは紺色のシンプルなワンピース。

鏡の前で髪を整え、深呼吸をひとつ。

バクバクと嫌な音を立てる心臓を落ち着かせようと胸に手を当てな

がら、私は隣の二〇三号室のインターホンを押した。

「はい。凜ちゃん、いらっしゃい」

ガチャリと開いたドアの向こうから、千紘くんがにこにここと現れた。肌触りの良さそうなオーバーサイズのカットソーを着た彼は、少し隙がある雰囲気で、それだけで胸が跳ねる。

千紘くんは私の姿を見ると、目をわずかに見開いた。

「あ……。ワンピース、可愛いね」

「えっ、あ、ありがとう……。お邪魔します」

まさか褒められると思っていなくて、早くも顔が熱くなる。

案内された部屋は、私の部屋と左右反転の間取りだ。白を基調とした室内は綺麗に整頓されている。

「適当にクッション座って」

「うん、ありがとう」

千紘くんはローテーブルの上に、お洒落な果実酒のボトルと、綺麗に盛られた生ハムやチーズの皿を並べた。

並んで座り、乾杯をしてお酒を一口すする。甘くてフルーティーで飲みやすいけれど、アルコール度数は意外と高いのかもしれない。じわじわと身体が熱くなり、フワフワとした心地よさが頭に上ってきた。

ボトルのお酒が半分くらいになった頃――。

「――そういえばさ、凜ちゃんて彼氏いる？」

不意に放たれた質問に、喉が詰まるかと思った。

ぶふ、と軽くむせながら、グラスをテーブルに置いて千紘くんを見

上げる。

「ええ!? い、いないよ。いない、いない」

「へえ……そうなんだ。じゃあ、前は？」

千紘くんはテーブルに頬杖をつきながら、興味津々と言いたげに首を傾げた。

お酒のせいか、少しだけとろんとした瞳が、妙に艶っぽくて、直視できない。

「えっ!? えと、前も、いないよ。ずっと、一度も……いない……」

（あー……。なんでこんな正直に答えちゃったんだろう、私……）

もっと上手に「内緒」とかなんとか言つて、うまくはぐらかせばよかった。

彼氏どころか、好きな人と両想いになった経験さえない。

それが私の恋愛歴の全てだ。

「そう、なんだあ……」

千紘くんは、なぜだか嬉しそうに目を細め、蕩けるような微笑みを浮かべた。

そんな顔を見せられたら、いくら恋愛経験皆無で、お酒で思考が鈍っていても期待してしまう。

（千紘くん、もしかして——）

——私に特別な感情を持ってくれている？

まさか。だけど、この距離感は、普通の友達じゃない。だとしたら？
酔いが回っているせいもあるかもしれないけれど、一度抱いた期待

はどんどん膨らんでいく。

「ち、千紘くんは？ 彼女とかいるの？」

勇気を振り絞って訊いてみる。

「ん？ いると思う？」

「……思わない、かな」

だって、彼女がいたら、ふたりきりになるのがわかっていて女の子を自分の部屋に招き入れたりしないはずだ。

少なくとも、私はそうだ。

「ん、せいかーい。いないよ。凜ちゃんと一緒」

千紘くんは嬉しそうに微笑むと、手元にあったグラスをコト、とロ―テーブルに置いた。

そのままじり、と私との距離を詰めてくる。ふんわりと漂う彼の柔軟剤の香りと、お酒の熱が混ざり合って、心臓がうるさいくらいに跳ねた。

「で、でも、千紘くん、かっこいいからモテそうだね」

「……………俺、かっこいいの？ 凜ちゃんから見て」

「え…………。え、と…………。う、ん。かっこいい、と思うよ…………」

まっすぐ見つめられて、私はしどろもどろに答えた。

「——ねえ、凜ちゃん」

熱に浮かされたような声で、名が呼ばれる。

「な、に…………？」

「——俺のこと、どう思う？」

その問いに、私は膝の上でぎゅっと拳を握ったまま俯いた。

「や、優しくて、かっこいい、って……思ってる、よ」

「そういうのじゃなくて」

千紘くんの手が伸びてきて、私の手に重ねられた。

「……っ」

「俺は――」

千紘くんは私と指を絡めると、耳元に顔を寄せて囁いた。

「好き。ずっと前から、凜ちゃんのことが好き」

ゾクリとするほど甘く低い声が、鼓膜を通して脳髓まで痺れさせる。そろそろと顔を上げると、真摯な瞳がすぐそばにあった。

「俺じゃ、ダメ？」

吐息混じりの問いかけに、私の答えなんて決まりきっている。

「だ、めじゃ……ない……」

蚊の鳴くような声で答えると同時に、唇に温かい感触が触れていた。柔らかい唇、甘いお酒の香り。

初めてのキスは、想像していたよりもずっと熱くて、官能的だった。

「全部、俺が最初になってもいい？」

次の瞬間、視界がぐらりと反転した。

背中に柔らかなクッションの感触。千紘くんには押し倒されたのだと理解するよりも早く、再び熱い唇が降ってきた。

「んむ……っ!?」

重ねられた唇は、いつもの優しい千紘くんからは想像もつかないほ

ど、熱くて、強引だった。

驚いて拒もうとする私の両手首を、彼は片手で軽々と頭の上に組み伏せる。お酒のせいだけじゃない熱が、一気に身体の奥へと駆け巡っていく。

「んふ、あ……っ、ちひ、ろ、くん……っ」

「ん、ちゅ……っ♡ 逃げないで？ ……可愛い、凜ちゃん。ずっとこうして触りたかった」

耳元で、甘く囁かれる。

千紘くんの熱い舌が、私の耳たぶを優しく、でも逃がさないように這い、首筋へと降りていく。

「ひゃ……っ！ あ♡ くすぐった……っ」

千紘くんは頭上に組み伏せていた私の両手首を解放すると、その長い指先をワンピースの胸元へと掛けた。フロントのボタンを不器用そうに、けれど少し急ぐような手つきでいくつか外していく。

彼の綺麗な指先が、下着ごと私の胸を包み込んだ。

「あっ……♡」

「凛ちゃん、おっぱい、すごく柔らかい……。触らせて」

千紘くんの視線が、私の胸元に釘付けになる。その瞳は、まるで初めて宝物を見つけた子供のように、じっと熱く、どこか必死な色を帯びていた。

「——っ」

千紘くんの喉が大きく上下した。

直後、ブラジャーが押し上げられ、ふるり、とおっぱいが剥き出しにされる。

外気に晒され、小さく震えるその頂へ、千紘くんは躊躇うことなく顔を寄せた。

「んちゅっ♡ んふ♡ 凜ちゃんの乳首♡」

熱く濡れた舌が、ちろりと乳首を舐め上げる。

ぞわりとした快感が背中を駆け抜けて、反射的に腰が跳ねる。

千紘くんは小さく笑うと、ぴちゃぴちゃと音を立てながら、私の乳首をまるで飴玉を味わうかのように舐めしやぶり始めた。

「あー♡ んっ♡ ちゅ♡ 想像してたよりちっちゃくて色うすっかわい♡ ちゅぱ♡」

「んあっ♡ あっ♡ ちひ、ろくん……っ♡ ま、って……え♡」

「乳首、ぷっくり勃ってきた♡ 可愛い♡ もっと舐めてもいい？」

「やっ……♡ 恥ずかし……っ」

千紘くんが乳首をちゅうちゅうと音を立てて吸いながら、目線だけ持ち上げる。

「ね？ 俺の彼女になって？ 好きだよ、凜ちゃん。本当に、大好き」
懇願するような瞳で見つめられ、「好き」を繰り返されると、私の
理性は簡単に瓦解していく。